

風通しをよくするための投書を

# もちろん他人の感受性と衝突すべきです

最近、新聞への投稿は控え気味という哲学者・中島義道さん。しかしウィーンから帰国後、しばしばうるさい日本を題材に投書し、おせっかいな騒音問題を世に提起した輝かしい実績がある。中島さんの新聞への投書の意味、そして極意を聞いた。

哲学者

## 中島義道

●なかじま・よしみち 1946年福岡県生まれ。前電気通信大学教授。現在「哲学塾・カント」主宰。専門は時間論・自我論・コミュニケーション論。著書は『うるさい日本の私』『醜い日本の私』『ひとを〈嫌う〉ということ』『孤独な少年の部屋』など話題作多数。

### 怒りは適度に放出すべき

——最近あまり投書をなさらないそうですが、なぜでしょう。  
そうですが、採用されず常連になってしまつと、採用されなくなるからです。朝日新聞をはじめ読売、毎日などへ投書をしてきましたが、「東京都 大学教授 中島義道」が、また何か言ってきたが、

この人は前にも載せたからボツにしようという担当者の選別があるのでしよう。

ですからいまは、本当にたまにですが、季節の行事に合わせて意見を投書するくらいです。たとえば花見シーズンに、花見会場の放送は異様にうるさく花を觀賞する気分を甚だしく害するから、早急になくすべきだ、というように書いて送る。新聞

社の担当者が載せやすい季節の話題を題材にすること——これはこれから投稿しようとする方へのアドバイスです。

——投稿記事①は「処女作」といいいいものですか？

そうですね、おそらくこれが最初だと思います。

——そして投稿記事②。騒音が氾濫する日本社会への異義申し立てです。

帰国しての実感を書いたままですが、賛否両論が湧き起り、読者欄としては盛り上がったんじゃないですか。すぐあとに防災行政無線について「嫌音論」という記事まで社会面に登場しましたから（うるさい日本の私」新潮文庫参照）。

——哲学者である中島先生が投稿に託すことは何でしょうか。

怒らない人が群れをなした社会、それがわが国の社会だと思えます。その背景について語ると長くなるので省きますが、怒りや異義申し立ては適度に放出しなくてはいけないのです。深刻なのは、怒りを適度に放出する以前に、怒ることすらできなくなつてしまつた人が大勢いるということです。これは突然キレる人が多くなつてしまつたことと無関係ではありません。

怒りを抑え込む、あるいは感受性

を殺すことは、人にとっていちばん危険な状態です。それは心身にとつて不健全だからで、だからそのつど

#### 投稿記事①

#### 「外国」の方が正しいですか

ウィーンに四年半滞在し帰国して三年半になりますが、このところ非常に奇妙に思うことがあります。それは、この「声」欄の意見をはじめ、多くの日本人が当然の権利のごとく、自国の悪口を諸外国との比較で述べたてていることです。ヨーロッパやアメリカの悪口を言えばゴウゴウたる非難があるのに、「日本は（諸外国に比べて）本当に住みにくい国だ」と言つてもほとんどとがめられません。

私の印象では、昨今の日本は（少なくともヨーロッパのどの国と比べても）安全で快適な生活が享受できる国だと思われるのに、これは一体どうしたことでしょうか。こうした自国批判者が、（多くのヨーロッパ人のように）外国に出るやいなや自国の弁護に必死

適度に放出する必要があるということとです。

この前提に立つてですが、私にと

になるといふのでしたら話はわかるのですが、私の経験では、こうした人々は外国でも、かの地の（うんざりするぐらい多い）日本批判に素直に同調し、一方、決して、その国の悪口は言わないように心掛けているようです。このような態度は、卑屈を通りこして滑稽としか言いようのないものです。

日本の悪口を熱心に言いたる人は、ヨーロッパ人やアメリカ人、あるいはアジア人に向かつてても忌憚なく相手の批判をすべきですし、一方、外国人に対してその国の悪口は一切言わないと決めこんでいる礼儀正しい人は、外国人のわが国に対するささいな批判に対しても、（それが事実であればあるほど）毅然とした態度をとるべきだと思います。これは、外国人と対等に付き合う基本原則だと思われのですが、いかがでしょうか。

（一九八七年七月十五日、朝日新聞）